氏　　名	山路　敦司
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	甲第２１号
学位授与年月日	平成２９年３月２３日
論文題目	武満徹のポピュラー音楽に見られる作曲語法 ―映画音楽における旋律の分析による実証を中心に―

学位論文等審査委員

＜リサイタル審査＞

主　査	教　授	前田　守一
副　査	准教授	岡田　加津子
副　査	准教授	中村　典子
副　査	教　授	津崎　実

＜論文審査＞

主　査	教　授	前田　守一
副　査	准教授	岡田　加津子
副　査	准教授	中村　典子
副　査	教　授	津崎　実

論　文　要　旨

本論は作曲家武満徹の音楽に見られるポピュラー音楽性に焦点を当て、そのポピュラー・ソングおよび映画音楽作品を中心に、旋律の音高遷移による楽曲分析を用いて音楽的特徴を抽出し、他の作曲家との比較を加えつつ武満のポピュラー音楽に見られる作曲語法として定義することを目的とした。問題意識は次の３点であった。（１）武満の作曲語法を論じる上でポピュラー音楽に対する視点が先行研究において少ない。（２）武満の作曲家像が「言葉」によって演出され偶像化されている可能性がある。（３）作曲家による表現意図の有効性について鑑賞者の視点や評価が介在していない。以上の３点について検討するため武満のポピュラー音楽作品の音高遷移の分析とそこに内在する音楽的特徴の抽出を行い、それをもとに映画音楽作品における旋律を中心に概観的な分析を行った。さらにポピュラー・ソングにおける聴取者の評価について実証実験を試みた。

第１章では、武満の生い立ちと音楽感覚の形成について概観し、作曲家を志すきっかけとなったリュシエンヌ・ボワイエのシャンソン《聞かせてよ、愛の言葉を》の聴取により受けた影響が、習作を含む最初期の現代音楽作品や付随音楽作品の中に具体的に見られることを確認した。とくに映画『狂った果実』における楽曲とその音楽演出について旋律の音高遷移を中心に楽曲分析を行い、両作品の共通性を通してその直接的な影響を具体的に指摘した。

第２章では、武満のポピュラー・ソング 20 曲を対象に楽曲構成・リズム・音階・旋法・音高遷移・和声について楽曲分析を行い、それらに共通する音楽的特徴について 11 項目の定型パターンを抽出した。音高遷移については移動平均近似曲線を提示し、また現代音楽作品におけるブルー・ノートの使用や「S-E-A」モチーフについてもポピュラー音楽的解釈により言及しながら、現代音楽作品に通底する作曲語法の可能性を検討する実例として具体的に指摘した。さらに武満を含む 6 人の作曲家によるポピュラー・ソングについて、音高遷移における隣接する２音間の音程パターンによる出現率の比較を行った。

第３章では、武満の映画音楽より抜粋した 72 作品のメイン・テーマおよび劇中曲を中心に、前章で抽出した 11 項目の音楽的特徴を用いた楽曲分析を通して、そのポピュラー音楽性について概観を行った。またそれらの旋律の音高遷移について具体的に検討したところ、作曲時期や作風の違いに関わらずその音楽的特徴は一貫して旋律中に内在することを確認した。さらに 1950 年代の松竹映画における２人の監督（中村登、渋谷実）との協同において、同一監督による黛敏郎の映画音楽作品との比較を行った結果、両者の映画音楽に対する作曲姿勢とその手法の違いを具体的に浮き彫りにした。

第４章では、武満のポピュラー・ソングの有効性ついて３つの実証実験を行った。実験１では武満のポピュラー・ソングを聴取した作曲経験者による旋律創作の実施とその 11 項目の音楽的特徴による楽曲分析を行い、各実施の結果には武満の音楽的特徴が捉えられ、隣接する２音間の音程パターンの出現率についてその有意性を確認した。実験２では一般聴取者に武満のポピュラー・ソングについて印象評価を行い、11 項目のうちの主要な音楽的特徴が刺激として認知されていることを確認した。実験３では一般聴取者に第２章の６人の作曲家によるポピュラー・ソングの識別実験を行い、武満の楽曲は「メロディーのリズム」と「メロディーの高さの動き」が注目されることを確認した。その結果、隣接する２音間の音高遷移について武満の楽曲間の相関性は低く、作曲家の識別は武満が最も低いことにより、一般聴取者にとって武満のポピュラー・ソングは音高遷移について作曲家の特性が識別しづらいことが明らかになった。しかし 11 項目による音楽的特徴について相関性は最も高く、作曲語法の定義としての妥当性が統計的に支持された。

審　査　結　果　の　要　旨

＜リサイタル審査＞

このリサイタルは、2016 年 12 月 15 日（木）18:30-20:10 本学大学会館ホールにて、映画のための 3 つの作品と映像を伴う 2 つの作品による下記のプログラム・内容で行われた。

１．『悲しき天使』（2006 映画公開　大森一樹監督）
　　弦楽四重奏
　映画全体に浸透する悲哀を表現・象徴する 4 音（E♭・D・B♭・G）を主要な音楽的動機として展開させ、主要な場面で用いることによって映画全体の統一感と構造化を図っている。映画本編のサウンドトラックはオーケストラ（チェコ po.プラハにて録音）によるもの。今回は弦楽四重奏用に編曲した版。

２．『正長の土一揆』（2015 映画公開　秋原北胤監督）
『蜘蛛の糸』（2011 映画公開　原作：芥川龍之介　秋原正俊監督）
　　龍笛・篠笛・他、二胡、笙、弦楽四重奏、ピアノ
　ジャンルも設定も異なる 2 つの映画のための音楽を連結させ構成したこの作品は、両作品の背景に流れるある程度共通した素材をサウンドコラージュ的に加工したアンビエント（ambient）的音響により、2 つの作品を接続する機能を持たせている。両作品においても音楽的動機（D・C・A）と（G・D・F♯）を用い展開し、ライトモチーフ的発想で映画全体の世界観を設計している。それらは動機展開に加え、使用音域・楽器・音響特性の区別によって聴覚的に場面設定を認識するよう目論んでいる。

３　『青銅の基督』（2016 映画公開　秋原北胤監督）
　　津軽三味線、エレクトリックギター、コントラバス
　映画本編のサウンドトラックは太棹三味線、バロックギター、ヴィオラ・ダ・ガンバによるトリオで、義太夫と西洋古典との対比と融合を主軸に特殊奏法とノイズを多用した即興演奏を主体に構成し、黛敏郎が担当した 1955 年版の音楽で最後のクライマックスにおいて用いた音楽的アイデアを主題として展開している。
　今回の演奏は、その音楽自体を解体、オリジナルに似て非なる楽器編成で全くスタイルの異なる演奏家の即興による特性を強調し、新たに再構成を行っている。それらはいわゆる定量的な記譜行為ではなく、演奏家とのリハーサルによる対話・現場におけるディレクションによって定着させる方式で、ある種「発注芸術」としての作曲家の在り方の模索でもある。
　全体は 6 つの場面に付曲されたものを基本としつつも、本番の演奏で如何に展開するかは確定させていない。そこで起こるスリリングさと寛容さこそが本来作曲家と演奏家の信頼関係に基づく真の共同作業と考えるからである、としている。

４．Dies Irae
　この作品は、映像（若桑江織による）と音楽によるもので、その音楽部分は「ポピュラーソング」に近い。現代音楽とポピュラー音楽研究との関連に対する整合性による表現をしている。曲中のヴォーカルパートには「グレゴリア聖歌」の「怒りの日」を用い、宗教的および文化的解釈、ポピュラー音楽的要素とブリコラージュ（Bricolage＝様々な異なる素材を使用して、その場で構成する手法）的な電子音楽とを混合し具体化。この作業は、多くの映画作品を手掛けた音楽家サイモン・フィッシャー・ターナーと協同し行ったもの。

５． LiNESOFLiGHT （ラインズ・オブ・ライト）

この作品は、3 台の映写機によるフィルム写真の反復映像を投影（トーチカ担当）するインスタレーションと音楽アンサンブルの演奏による協同パフォーマンス作品。

音楽については、トーチカの映像表現手法「PiKAPiKA＝光のラクガキ」による「線」の発想を共通コンセプトとしてそれを音楽に応用、博士論文の研究テーマである「旋律における音高遷移（音の高さの移り変わり）」について検討、「音のラクガキ」により実証を試みている。

今回のリサイタルで演奏された、5 つのプログラムは申請者の博士論文の研究テーマと関連して、武満徹の映画音楽におけるポピュラー音楽的な作曲手法を自身の作曲に実践的に応用するかたちで再作曲または解体と再構成を行い、リサイタル形式で映像を含む作品個展として発表したものである。

その中でも際立っていたのは、予め与えられた旋律やコードをもとに奏者に委ねる即興演奏が予想以上に表現力が強くかつ印象深く、効果的に映像に携わるさまを彷彿とさせる箇所が多々感じられたことである。これは作曲者（申請者）がプログラムノートで語っている「映画および映像作品に付随する音楽表現には確固たるルール・セオリーは存在しない。いかに音によって映像を演出するか、作曲家はなによりもまず優先すべきと考える」を、見事に実践したひとつの結果であろう。

また一方では「LiNESOFLiGHT」のように、フィルム写真の投影スピードを少しずつ増していく映像に、五線上に線グラフの音高遷移を示して即興させる極めて自由度の高い音楽を、厳密に記譜された音楽で前後を挟むように構成されたこの作品は、映像と音楽の繊細な一体感を作り上げることに成功していた。またこの作品では、3 台の投影機が発する機器ノイズが、この作品の記譜された部分の基音（A♭）となっていて、特に作品の終結部分では機器ノイズと演奏（音楽）が同調し、映像・音楽が一体となってドラマチックな終幕を演じているようにも感じられ、作曲者の意図以上に大きな効果を上げていた。

全体を通して、それぞれの作品（音楽）が映像に求められるもしくは映像を支える極めて効果的な表現力がうかがえ、武満徹の映像作品を中心として論考を進めた博士論文での研究成果を反映したリサイタルになっているとともに、なによりも豊かな音楽表現を有した作品群の提示となっていた。

リサイタル終了後、主査と 3 人の副査、全員一致で「合格」とした。

＜論文審査＞

審査の方法

審査に先だって候補者による学位論文内容に関する公聴会が審査当日の 13:00 から約 1 時間半に渡って行われた。その場における発表の内容と発表態度，質疑応答に関する対応の仕方についても論文の内容に含めて審査の対象とした。

審査員は論文の内容ならびに公聴会での発表内容を踏まえて，記述内容，発言内容の主旨を問いただし，また研究内容との関連性があると思われる周辺の知見や従来的な考え方との差異や共通性の部分について確認する形で候補者の持つ専門知識が博士の学位を授与するに値するかの判断材料を集めた。

審査の内容

候補者の論文の内容は，予備審査報告の際にも述べたように，日本の現代作曲家として知名度も高い武満徹の作曲技法に関して，彼の手がけたポピュラーソングのうち映画音楽を研究素材の核として取り扱い，前衛音楽家としての位置づけが強調されてきた今までの「武満徹」像に新たな側面からの光を当てようとしたものである。予備審査の際に指摘された部分に対する

修正を経ても以下に記載するような論文の特徴はしっかりと保たれ，武満徹像をより鮮明にしつつ，作曲という行為に対する様々なあり方に対して読者が深く思考するための良質な資料と多角的な視点を提供している。論文の特徴は以下のものである。これは予備審査報告の際の記述をそのまま引用する。

> 素材音楽の取扱についても，作曲を専門として実践する立場の長所を活かした楽曲分析だけに留まることなく，音高の推移の２次統計量となる音程の出現頻度ヒストグラムを用いて同時代の他の作曲家との統計量的な視点での違いを用いたり，また，聴取実験を通して武満作品の特徴付けが可能かどうかを探る試みなど，意欲的な展開がされている。楽曲分析は個別の作品についてすべての情報を掲載することを敢えて避け，その中でも論旨を支える上で重要である部分に限定して，作品を横断して観察できる武満の作曲技法を浮かび上がらせる方針を採っており，論旨との関連が見えやすい展開となっている。これらの傍証を通して，取扱が困難なポピュラー作品に対する武満の創作の場面での姿勢への解明を進めている。その結果として武満の基本姿勢において前衛的な，いわゆる芸術作品の場合とポピュラーソングとの創作のあり方には不整合な部分がないことを説得力も持った形で論じ，それを支える客観性の高い資料を提供することに成功している。

予備審査時に指摘された修正すべき点は，以下の２点であった。(a) せっかくの多くの資料を提示していながら，結論の書き方のせいもあって候補者自身の考え方が明確に伝わって来にくい。(b) 武満という存在を研究することを通して見えてくる音楽のあり方についての著者としての主張点は何であるのかをさらに鮮明に記述するべきである。今回の本審査を受けた論文では，結論部での記述から曖昧にぼかすような部分が適切に取り除かれたり，書き換えを通してより著者としての結論を鮮明に訴えるものへと改善されたと評価された。予備審査時の原稿の中で著者の主張が見えにくくなっていた最大の要因は以下の点にあった。(1) 著者自身は「武満徹の作品には『うたうこと』を基調とした旋律面での特徴が存在するはず」との予想から，その楽曲の特徴を楽曲分析によって明確にした。(2)さらに武満自身が数々残した自作に対する文言による発信の影響を排除して，中立的あるいはナイーブな態度で聴取してもその特徴が旋律の特徴としての知覚的インパクトを持ちうるのかを実験心理学的な手法を用いて実験したところ，そのような楽曲分析上の特徴は言わば普遍的な特徴であり，作家の作風を瞬時に決定づけるようなものとはなっていないことを示す実験結果が得られてしまった。この(1)の姿勢と(2)の客観的な結果をどのように整合させるかについての結論部の書き方にある種の躊躇が存在したため，武満の作曲語法としての特徴と武満作品が聴取者に与えるインパクトの要因との関係性の理解が困難になっていた。今回の改稿によって，武満の旋律の作り方の楽曲分析的な特徴は，聴取者にとっては作家の特定に至るまでの知覚的な特徴とはなりにくく，それでも武満作品がそのアイデンティティーを持つのは「武満トーン」などの代名詞に見られるような音響的な選択のあり方の比重が高いという実状を鮮明に打ち出している。このような武満像，特に彼のポピュラー音楽と芸術音楽の間の関連性に注目した系統的な研究は先例がなく，候補者が導いた結論には今後の様々な批判が起きる可能性がある。但し，それは論文の瑕疵ではなく，むしろ論文としてのインパクトの高さを示すものと考える。論文の内容としては，武満徹という作曲家の人物像を明確にし，その作品の作曲語法としての譜面上に見られる特徴を洗い出し，さらに知覚実験での客観的なデータの提供という緻密な判断材料が充填されており，小手先の批判ではびくともしない強さを備えているし，そのような批判が巻き起こることは音楽を表層だけでなく深いレベルで語る上で大切な役割を果たすはずである。以上のように論文の内容に関しては博士の資質に適うものであると判断される。さらに専門領域を核とした音楽に関する周辺の基礎知識，時代背景に関する統一的な視座，質疑応答に対しての理解力，客観的反論能力などに関しても質疑応答の過程を通して確認された。候補者の知識基盤を試したり，また結論部を別の視点からさらに展開できる可能性について問いただす展開にも，候補者はその時々に冷静かつ適切に対応し，語れるべきことは語り，語れないことは語れないことを質問者に的確に応答することができていた。